

ヨハネ1章19-51節 「イエスを見る証人たち」

1A ヨハネの後に来る方 19-28

1B 荒野で叫ぶ声 19-23

2B 間に立つ知らない方 24-28

2A 神の子羊 29-34

1B 知らなかった方 29-31

2B 御霊の降臨 32-34

3A メシア 35-42

1B ラビとの宿泊 35-39

2B ケファの名 40-42

4A 天からの梯子 43-51

1B 「来て、見なさい」 43-46

2B 偽りのないイスラエル人 47-51

本文

ヨハネによる福音書1章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは前回、1章 18節まで来ましたので、後半を見ていきたいと思います。

1A ヨハネの後に来る方 19-28

1B 荒野で叫ぶ声 19-23

19 さて、ヨハネの証しはこうである。ユダヤ人たちが、祭司たちとレビ人たちをエルサレムから遣わして、「あなたはどなたですか」と尋ねたとき、20 ヨハネはためらうことなく告白し、「私はキリストではありません」と明言した。

私たちは前回、使徒ヨハネが福音書を書くにあたって、バプテスマのヨハネについて書き始めていました。「6 神から遣わされた一人の人が現れた。その名はヨハネであった。7 この人は証しのために来た。光について証しするためであり、彼によってすべての人が信じるためであった。8 彼は光ではなかった。ただ光について証しするために来たのである。」そして、「まことの光が、世に来ようとしていた。」と対比させ、あくまでもバプテスマのヨハネは証しであり、彼自身は光ではないということを前置きしていました。

このように使徒ヨハネが語っているのは、ユダヤ人たちの中にこの方がキリストではないのか？という期待があったからです。ルカによる福音書には、「3:15 人々はキリストを待ち望んでいたので、みなヨハネのことを、もしかするとこの方がキリストではないか、と心の中で考えていた。」

とあります。当時、相当のメシアを待望、いや熱望している気運がありました。最後の預言者、マラキが預言してから、既に 400 年ぐらいが経っています。それはあたかも、ヤコブの家族がエジプトに下って、エジプトで奴隷の苦役によってうめき、泣き叫んでいて 400 年後に、モーセが現れたのに似ています。人々は、モーセのような偉大な預言者が現れ、イスラエルを救い出してくれると期待していました。そして、その方が救世主、メシアであることも期待していました。つまり、イスラエルを救うだけでなく、ローマの支配を終わらせ、神の国を立ててくださる方を待ち望んでいました。

そんなときにヨハネが預言活動を始めたのです。エリコに近い、ユダの荒野で神のことばを語り始め、悔い改める者たちには水でバプテスマを授けていました。かなりの広範囲から、人々がやってきていました。そこで、「ユダヤ人たちが、祭司たちとレビ人たちをエルサレムから遣わして」とあります。エルサレムには、サンヘドリンと呼ばれるユダヤ人議会がありました。それは 70 人、正確の議員からなる評定期間がありました。祭司、レビ人、パリサイ派の人たちなどからなる宗教指導者たちの集まりです。彼らは、いろいろなユダヤ教の運動が出て来るので、それを審査して問い質す、審問をしていました。今、ヨハネに対して行っているのはまさにそれです。自分がキリストなのではないか？という期待が人々の中にあつたので、彼はためらうことなく、「私はキリストではない」と答えています。

21 彼らはヨハネに尋ねた。「それでは、何者なのですか。あなたはエリヤですか。」ヨハネは「違います」と言った。「では、あの預言者ですか。」ヨハネは「違います」と答えた。

キリストでなければ、エリヤではないのか？という議論もユダヤ人の中で行われていました。なぜなら、最後の預言者マラキが、主が来られる前にエリヤが来ることを預言しており、今でもそのような期待があります。ユダヤ人の過越の祭りの儀式には、エリヤの座る席のために椅子を一席空けて、子供たちにエリヤを探しに行かせることさえします。しかし、エリヤでもないと言います。ルカによる福音書によると、ガブリエルが父ザカリヤに、エリヤの霊と力によって来ることを伝えましたが、それは彼がエリヤということではなく、エリヤに働かれた同じ御霊の力で来るということです。

そして、「あの預言者」というのは、モーセのような預言者が現れることを、モーセ自身が死ぬ前にイスラエルの民に前もって伝えていました。「申 18:15 あなたの神、【主】はあなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のような一人の預言者をあなたのために起こされる。あなたがたはその人に聞き従わなければならない。」この言葉はメシアのことを指していると考えられていましたが、また別の預言者ではないか？とも考えられていました。

ここで大事なのは、バプテスマのヨハネの言葉が少なくなっていることです。「私はキリストではありません」と言って、次に新改訳ですと、「違います」と繰り返しているように見えますが、ギリシア語では、初めが「エイミ・ウーク」、次に「ウー」というように、短くなっています。「私は違います」

「いいえ」となっています。ヨハネは、自分に焦点が当てられているのを強く避けている様子が見えます。主の到来が近づいている、いや、主がもう既に来られている、という時に、彼は自分自身から人々の目をそらさせ、キリストに目を向けるように証しているのです。私たちの模範ですね、私たちが伝えるのは自分自身ではなく、宣べ伝えるのはキリストご自身です。

22 それで、彼らはヨハネに言った。「あなたはだれですか。私たちを遣わした人たちに返事を伝えたいのですが、あなたは自分を何だと言われるのですか。」23 ヨハネは言った。「私は、預言者イザヤが言った、『主の道をまっすぐにせよ、と荒野で叫ぶ者の声』です。」

彼らは審問のために正式にされていますから本部に返答を持って帰らなければならないのです。それで、あなた自身は何だと言われるのか？と聞いていますが、ヨハネは、イザヤが、エルサレムに王なる方が来られて慰めを受けるにあたって、荒野から、その道を真っ直ぐにしなさいと言う声がするという預言があります(40:3)。声にしすぎない、という控えめさをここで言い表しています。

2B 間に立つ知らない方 24-28

24 彼らは、パリサイ人から遣わされて来ていた。25 彼らはヨハネに尋ねた。「キリストでもなく、エリヤでもなく、あの預言者でもないなら、なぜ、あなたはバプテスマを授けているのですか。」

祭司とレビ人が遣わされて来ていますが、遣わしている主体はパリサイ派の議員たちです。パリサイ派は、聖書と、言い伝えられている口伝律法に厳格に従っていました。ですから、神学的にきちんとした回答を得なければ戻ることができません。バプテスマをヨハネが授けていますが、ユダヤ教では水に全身浸かる儀式はよく行われていました。しかし、何の権威によって、何の名によって行っているのかを尋ねています。

26 ヨハネは彼らに答えた。「私は水でバプテスマを授けていますが、あなたがたの中に、あなたがたの知らない方が立っておられます。27 その方は私の後に来られる方で、私にはその方の履き物のひもを解く値打ちもありません。」

ヨハネは、後でこの方は聖霊によってバプテスマを授けると言っていますが、この審問に来てい
る人々には明確に答えなかったようです。その方が後から来て、自分とは比較にならない偉大な
方であることだけをはなします。履き物のひもを解くのは、僕のすることですが、僕以下だとい
うことです。これは他の福音書にも出て来ることですが、使徒ヨハネは、「あなたがたの知らない方」と
いう言葉を加えているところが、興味深いです。知らない、というのは情報としてではなく、霊的に、
親密に、知っているということです。主を知らないというのは、人格的に知らないということであり、
知識のことではありません。聖書では、そもそも知識というのは、私たちの考えているような知性
における知識ではなく、人格も含む知識のことです。そして、そういった意味で主を知らなければ、

このエルサレムからの派遣団に応えても意味がないということです。

28 このことがあったのは、ヨルダンの川向こうのベタニアであった。ヨハネはそこでバプテスマを授けていたのである。

ヨハネは、読者にはよく知られている「ベタニア」と区別するために、「ヨルダンの川向こうのベタニア」と言っています。私たちは2016年の聖地旅行で、ヨルダンも旅行しましたが、「ヨルダンの川向こうのベタニア」に行きました。私たちはとかく、聖書の舞台は今のイスラエルだけと思って、ヨルダンとか、エジプトとか、またトルコ・ギリシアというと、あまり興味を示しませんが、ヨルダンの一部は、当時は列記としたイスラエル領です。ユダヤ人の領主である、ヘロデ・アンティパスがペレア地方としてところです。ですから、ヨルダンのほうからヨルダン川に近づきますと、古代教会の跡地があり、そこに洗礼を授けた遺跡も発掘されています。

2A 神の子羊 29-34

1B 知らなかった方 29-31

29 その翌日、ヨハネは自分の方にイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の子羊。」

使徒ヨハネは、1章後半が数日間以内の短期間のことであることを克明に記しています。ここでは、翌日のことだと言っていますね。そして35節に、「その翌日」とあります。そこで弟子たち二人がイエス様のところに行きます。43節にさらに、「その翌日」とあります。ガリラヤ地方に向かうにあたって、さらに二人の弟子たちを呼び出されます。

バプテスマのヨハネは、「見よ、世の罪を取り除く神の子羊。」と言っています。使徒ヨハネは、自分の福音書の中で、「見る」という言葉をたくさん使っています。見ると言っても、そこにはじっくりと見る、注意して見る、という意味合いがあるし、また、会うと言う意味での見るもありますし、百聞は一見にしかず、ではないですが、「見ることによって、知ることができるのだ」という体験を語っています。言葉による説明で知るのではなく、見ることによって、その本質的な部分、深い部分までも知るのだということです。

バプテスマのヨハネは、「世の罪を取り除く神の子羊」と叫びました。これは驚くべきことです、キリストが苦しみを受けて、民の罪のために死なれるということは、弟子たちが甦りの主を見なければ悟ることのできなかつたものです。ルカ24章で、私たちは学びましたね。けれども、バプテスマのヨハネは、自分自身、どこまで理解していたか定かではなかつたでしょうが、それでも、預言者として、天から与えられた知識として、この方を「世の罪を取り除く神の子羊」と叫んだのです。ユダヤ人たちにとって、子羊が、罪の赦しのため、罪からの清めのために神殿の祭壇で捧げられるこ

とをよく知っていました。そして、過越の祭りにおいて、各家庭で子羊の初子を屠り、その血を家の門柱と鴨居に塗り、それで子羊の肉を家の中で食べました。それによって、エジプトに下る神の災いが過ぎ越したのですが、この過越の祭りを、罪を取り除き、御怒りから救ってくださるキリストを示しているものとして、ヨハネはここで語っているのです。

30 『私の後に一人の人が来られます。その方は私にまさる方です。私より先におられたからです』と私が言ったのは、この方のことです。31 私自身もこの方を知りませんでした。しかし、私が来て水でバプテスマを授けているのは、この方がイスラエルに明らかにされるためです。』

使徒ヨハネは、前置きにおいて既に、バプテスマのヨハネのこの言葉を、15 節で書き記していました。なぜ、自分より優っているのかの理由が大事です。「私より先におられた」ということです。彼が先に生まれたことは確かで、なぜなら彼の母エリサベツのところに、妊娠したばかりのマリアがやって来て、その時に既に妊娠六か月になっていたからです。しかし、自分よりも先におられたというのは、ヨハネは、この方が単なる人ではなく、神から来られた方であり、初めに神と共におられた方であることを知ったからです。

そして、バプテスマのヨハネ自身が告白しています、「私自身もこの方を知りませんでした。」ということです。もちろん、ヨハネはイエス様のことを知っていました。しかし、この方が本当の意味で誰かを知りませんでした。先に既におられた方など、知る由もありませんでした。しかし、初めからおられる神の子であることを、神ご自身によって示され、確認することができたのです。それで、人々の心備えをするために、人々がこの方を信じて、受け入れるようにするために、前もって悔い改めのバプテスマを授けていました。

2B 御霊の降臨 32-34

32 そして、ヨハネはこのように証した。「御霊が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを私は見ました。33 私自身もこの方を知りませんでした。しかし、水でバプテスマを授けるようにと私を遣わした方が、私に言われました。『御霊が、ある人の上に降って、その上にとどまるのをあなたが見たら、その人こそ、聖霊によってバプテスマを授ける者である。』34 私はそれを見ました。それで、この方が神の子であると証しをしているのです。」

ここのヨハネ 1 章にある、バプテスマのヨハネの語っているのは、他の福音書に書き記されている、イエス様がバプテスマを受けられた後の出来事でした。ヨハネのところに、イエス様が来られました。そして、ヨハネは自分が受けなければいけないのに、と申しあげたら、「マタ 3:15 今はそうさせてほしい。このようにして正しいことをすべて実現することが、わたしたちにはふさわしいことです。」とイエス様が言われて、それで主は、バプテスマを受けられました。すると、天が開けて、聖霊が鳩のようにイエス様の上に降られました。そして天から声があつて、「これはわたしの愛する

子。わたしはこれを喜ぶ。」という父なる神の声があったのです。

この出来事の前に、バプテスマのヨハネは、バプテスマを人々に授けなさいと命じられた神ご自身が、「御霊が、ある人の上に降って、その上にとどまるのをあなたが見たら、その人こそ、聖霊によってバプテスマを授ける者である。」と教えていられたのです。そうしたら、事実イエス様のところに御霊が降られたので、それで、この方が神の子であると知ったのです。天からの声が、「これはわたしの愛する子。」とありましたから、この方は神の子です。ここでヨハネが、「見ました」と強調しているのに気づいてください。

ところで、バプテスマのヨハネは、はっきりと自分が水のバプテスマで、イエス様が聖霊のバプテスマを授けるということで対比させ、イエス様のバプテスマがはるかに優っていることを、暗に示しています。これは、律法はモーセによって与えられたが、恵みとまことはイエス・キリストによって実現すると使徒ヨハネが言ったように、ユダヤ人の儀式とその実体の違いでもあります。水のバプテスマは大切です。けれども、そこに実体である聖霊の満たしがあつてこそ、真実の証し人となることができます。使徒の働きは、その使徒たちの証しを克明に記したものです。イエス様を知っているのか？ということについて、「知っている」ということのできる証言は、聖霊の力によるものでなければなりません。多くの人にとって、イエス様については知っているのかもしれないけれども、イエス様が本物、リアルな方であるのかどうかは、聖霊のバプテスマが必ず必要なのです。

3A メシア 35-42

1B ラビとの宿泊 35-39

35 その翌日、ヨハネは再び二人の弟子とともに立っていた。36 そしてイエスが歩いて行かれるのを見て、「見よ、神の子羊」と言った。37 二人の弟子は、彼がそう言うのを聞いて、イエスについて行った。

バプテスマのヨハネは、預言者ですから、彼には弟子たちがいました。当時、ユダヤ教のラビは、パートタイムにしろ、フルタイムにしろ、共に生活をする弟子たちを持っていました。バプテスマのヨハネにもいたのです。その中の二人が、彼の呼びかけに応答しました。「見よ、神の子羊」とヨハネは言いました。そして、イエス様について行ったのです。イエス様は、宣教命令で、「弟子を造りなさい」と言われましたが、真実な弟子造りは、自分から離れてでも、イエス様について行くようにすることです。自分のもののようにして囲ってしまうのであれば、その人はイエスの弟子を造る者としてふさわしくありません。

38 イエスは振り向いて、彼らがついて来るのを見て言われた。「あなたがたは何を求めているのですか。」彼らは言った。「ラビ(訳すと、先生)、どこにお泊まりですか。」39 イエスは彼らに言われた。「来なさい。そうすれば分かります。」そこで、彼らはずいて行って、イエスが泊まっておられ

るところを見た。そしてその日、イエスのもとにとどまった。時はおよそ第十の時であった。

このやり取りは、当時、あるラビのところの弟子入りをしたい時の会話としてよく出てきましたが、とても意味深い言葉のやり取りです。「あなたがたは何を求めているのですか。」ということに対して、「どこにお泊まりですか」と尋ねています。求めているのは、ラビから安易な解答を得ることでなく、泊って共に時間を過ごし、夜を明かすようなところにあるのだということです。ここで、「第十の時」とありますが、今の時刻では午後 4 時頃です。「泊まる」というギリシア語、メノウは、ヨハネの福音書に数多く出てきます。もう一つは「留まる」という訳で、ここにも出てきます。わたしに留まれば、多くの実を結ぶと言われた時の、留まるのです。ですから、安直な解答ではなく、宿泊して、イエスという方のところに留まって、そこにある命を見るのです。

2B ケファの名 40-42

40 ヨハネから聞いてイエスについて行った二人のうちの一人は、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。41 彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて、「私たちはメシア(訳すと、キリスト)に会った」と言った。

イエス様について行った弟子二人の一人はアンデレで、ペテロの兄弟でした。もう一人の弟子は、もしかしたら使徒ヨハネ自身かもしれませぬ。アンデレはペテロにまず伝えたいと強く願い、おそらく想像するにヨハネは兄弟ヤコブに伝えに行ったのではないか？と思われませぬ。興奮と喜びの中でアンデレは、「私たちはメシア(訳すと、キリスト)に会った」と言ったことでしょう。ここでの「会った」も、「見た」と訳してよい言葉です。アンデレも、バプテスマのヨハネと同じく、初めからいきなり、この方が誰なのかをはっきりと宣言しています。自分で何を言っているのかまだその意味を分かっていないけれども、しかし、この方に会って、その見たということによって、その本質を霊によって示された、と言ってよいでしょう。私たちには、このような霊による知識が必要です。誰が何といっても、知識が何といっても、そういったものは関係なく、イエスを知るのです。

そして、「メシア」をわざわざ、「訳すと、キリスト」としているのは、ヘブル語を解さない人々が読者にいることを想定しています。ギリシア語のみを話すユダヤ人もいるでしょうが、それ以上に異邦人の読者を意識しているのでしょう。ヨハネの福音書は、異邦人に対して書かれたのだ、またユダヤ人に対して書かれたのだという議論があります。私は、これはどちらも無意味だと思います。マタイはユダヤ人を意識して、マルコはローマ人を、そしてルカはギリシア人を意識して書いたと思われませぬが、ヨハネは、「信じる者すべて」を意識していたと思われませぬ。ユダヤ人にしか分からない、深いユダヤ教の儀式の中身に、モーセの律法の中にヨハネは立ち入りますし、またイエス様の宣教はガリラヤが中心だったのに、ヨハネは敢えてエルサレムにユダヤ人の祭りに参加される姿を数多く描いています。そして、ここで見るように、明らかにユダヤ人ではない人々にも知ってほしいと思って書いているのです。前回、説明するのを忘れましたが、ギリシア語「ロゴス」は、ユダヤ人

が「神の言葉」としても知っていたし、ギリシア人も哲学者などがこの言葉を使って、「言葉の背後にある考え、思想」のような理解をしていました。ですから、ユダヤ人が読んでも、ギリシア人が読んでも理解できる書物だったのです。

42 彼はシモンをイエスのもとに連れて来た。イエスはシモンを見つめて言われた。「あなたはヨハネの子シモンです。あなたはケファ(言い換えれば、ペテロ)と呼ばれます。」

アンデレは、「連れて来た」という働きを行いました。アンデレと、次のピリポは、人をイエス様のところに連れてくる働きで、他のところにも出てきます。例えば五千人の給食では、男の子を連れてきたのはアンデレです。そして過越の祭りにギリシア人が来ていたのですが、彼らをイエス様のところに連れてきたのは、アンデレとピリポです(12:20-22)。すばらしい働きですね、私たちは、ただイエスのところに人々を連れて来るという働きに従事できるのです。

そして、ペテロはイエス様のところに連れて来られて、イエス様が彼を見つめておられます。自分がイエス様を見るだけでなく、いや、それ以上に、イエス様に見つめられています。私たちも同じです、私たちがイエス様を本当の意味で見る前に、既にイエス様が私たちを見つめておられ、そして個人的に知ってくださっているのです。皆さんは、このことを知っていますか？つまり、イエス様に個人的にあなたは知られているということです。

そして聖書の他の箇所でもそうですが、神は人に新たな名前を付けられます。アブラムに対してアブラハムという名を与えられました。ヤコブに対して、イスラエルという名を与えられました。ここでイエス様は、ケファと名づけられました。ギリシア語でペテロであり、それは岩という意味です。岩といっても、石に近い小さなものです。彼の粗い性格をよく知っておられたのでしょう。しかし、イエス様は後に、アンデレがここで告白したことを、悟りをもってはっきりと、「あなたは生ける神の御子キリストです」と告白します。そしてイエス様は彼に、いや、彼の告白の上に、ペトラというギリシア語なのですが、それは大岩です。崖のような大きな岩です。ペトラの上に、わたしの教会を建てると言われました。

4A 天からの梯子 43-51

1B 「来て、見なさい」 43-46

43 その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされた。そして、ピリポを見つけて、「わたしに従って来なさい」と言われた。44 彼はベツサイダの人で、アンデレやペテロと同じ町の出身であった。

翌日の出来事です。すぐにガリラヤに行かれようとしていました。ガリラヤで宣教の働きを始められます。ヨハネの福音書は、他の福音書のガリラヤ宣教より前のイエス様のこれらの働きを書き記しています。他の福音書では、その時々弟子たちを呼び出されて、ご自分に付いてくるように

されましたが、もう既に何人かは、ヨハネの弟子だったところから、イエスの弟子となるという決断をしていました。けれども、ペテロがそれでも漁をまだしていたように、パートタイムでの弟子であり、本格的に主に出会い、この方に従うのは、もう少し後になることがわかります。

ピリポは、ベツサイダの人です。実はアンデレやペテロも同じ町の出身です。ベツサイダは、ガリラヤ湖畔でも、北東にある町です。ペテロやアンデレは、ベツサイダからカペナウムにいつの日か引っ越して、それでそこに家があったのでしょう。イエス様の弟子たちは、このように実際の兄弟であったり、また同じ町出身であったり、小さな仲間の輪で広がって行っています。私たちも、人間関係や親戚関係、同郷の人とか、そういったところでイエス様の弟子になっていく動きを、主が起こしてくださっても全く不思議ではありません。

45 ピリポはナタナエルを見つけて言った。「私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです。」46 ナタナエルは彼に言った。「ナザレから何か良いものが出るだろうか。」ピリポは言った。「来て、見なさい。」

ヨルダンの向こうのベタニアには、ピリポの他にナタナエルもいました。彼は他の福音書では、ピリポと共に出て来る「バルトロマイ」ではないか？とされています。ナタナエルの名前は、「神は与えたもう」という意味です。

ここで「ピリポは見つけて」と言っていますから、ピリポは、ナタナエルにはぜひ会わせたいと強く願って、情熱的に語ったことでしょう。「モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。」であります。これは、言いかえればキリストです。ナタナエルが、敬虔なユダヤ教徒であり、聖書のこともよく知っていて、ただそう言えばメシアであることが分かるように話しています。そして、ここでもピリポは、「会いました」と言って、単に語っているのではなく、本当に会ったのだと言っているのです。

ナタナエルは、「ナザレから何か良いものが出るだろうか。」と答えています。メシアならば、ダビデの町であるエルサレムや、またダビデが統一イスラエルの王となる前、ユダの王としてヘブロンから君臨しましたが、ヘブロンから出て来るのならわかりますが、ナザレはガリラヤの町です。それだけでも、「ああ、田舎ね」ということになります。しかも、ナザレは何でもない、本当に小さな村であり、当時の文献にもガリラヤの数ある町々でも、ナザレの名前は記録されていません。ですから、何か良いものが出るだろうか？とナタナエルは答えているのです。

ここで、ピリポが偉いのは、「来て、見なさい。」と言ったことです。理屈抜きで、とにかく来て、そして見なさいということです。見る、ということは本当に理屈抜きです。イエスを見る、イエスに会うということは、理屈がありません。砂糖の味を口にすることなくして、どうやって味見することができる

るでしょうか？口で説明しても無理です。同じように、いやそれ以上に、見なければ、この方を知ることはできないのです。「詩 34:8 味わい見つめよ。【主】がいつくしみ深い方であることを。幸いなことよ主に身を避ける人は。」

そのために、「来て」とあるように、来ないといけません。あまりにも多くの方が、分からないからといって来ないのです。その逆です、来ないから分からないのです。イエス様は後に、ベテスダの池のそばでユダヤ人たちに迫害されそうになっていた時に、彼らにこう言われました。「5:40 あなたがたは、いのちを得るために、わたしのもとに来ようとしません。」このように、ピリポ、そしてアンデレは、来て、見てもらうということをするのに長けていました。私たちは、来て、見てもらう働きをしていきたいですね。

2B 偽りのないイスラエル人 47-51

47 イエスはナタナエルが自分の方に来るのを見て、彼について言われた。「見なさい。まさにイスラエル人です。この人には偽りがありません。」48 ナタナエルはイエスに言った。「どうして私をご存じなのですか。」イエスは答えられた。「ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見ました。」

非常に興味深い会話になっています。人々が、イエス様に対して「見よ」と言っていました。ここでは、イエス様のほうが「見なさい」と言われています。そして、「まさにイスラエル人です。この人には偽りがありません。」とは、どういうことか？後で、イエス様が、天からの梯子の話をされます。これは、ヤコブに主が新しい名、イスラエルを与えられた時のことです。ヤコブは、かつてイサクに対して、自分はエサウであると偽りました。しかし、エサウに再会しなければならなくなった時、主の使いであり、主ご自身であられた方と、格闘しました。「あなたの名は何というのか。」と尋ねられた時に、彼は偽りを言いませんでした。「ヤコブです。」と答えたのです。もはや、偽るヤコブではなく、神の勝利であるとか、神に支配されるという意味の、「イスラエル」という名を、主が与えたのです。ナタナエルという名の意味が、神が与えたもうということですから、彼が、「まさにイスラエル人です」と言われた時に、彼には驚き以上の、回心に近い衝撃を受けたことでしょう。

ナタナエルが、「どうして私をご存じなのですか。」と聞いていますが、これは自分が偽りのない人間だと誇っているのではなく、どうしてこのような人間に、そのような恵みの言葉をかけてくださるのか？という、驚きです。そしてイエス様は、彼がいちじくの木の下にいるのを見た、と言われていました。再び、「見た」という言葉です。イエス様が見ておられたのです。いちじくの木は、安全、休息、そして思い巡らす場を象徴しています。ゼカリヤ 3 章 10 節に、主が神の国を立てられ、王また祭司として治められる時に、「あなたがたは互いに自分の友を、ぶどうの木といちじくの木の下に招き合う。」という約束があります。イエス様は、ナタナエルが、平穩に、休みながら、主のことを思い巡らしていたのではないか？と思われます。そういった姿を主は見て、恵みをもって祝福して

くださいます。主は私たちが恵みの顔を向けて、私たちを見ておられます。「民数 6:25 主が御顔を照らし、あなたを恵まれますように。」という祝祷は、主が微笑みをもって見てくださっている、という意味です。

49 ナタナエルは答えた。「先生、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」

ナタナエルが、主が復活される前に告白したこの告白は、まだ深く理解していたわけではないでしょう、しかし先のバプテスマのヨハネ、そしてアンデレ、ピリポと同じように、この方を見て、知って、そこで霊によって発した言葉であったのでしょうか。神の子であり、イスラエルの王とは、イザヤ 9 章 6 節にはっきりと、神の与えられる子に、ダビデの王座が与えられ永久に治められ、また、「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる、とあります。詩篇 2 篇にも、「今日、わたしはあなたを生んだ」とあり、それから諸国を鉄の杖で治めるキリストの姿が出てきます。

50 イエスは答えられた。「あなたがいちじくの木の下にいるのを見た、とわたしが言ったから信じるのですか。それよりも大きなことを、あなたは見ることになります。」51 そして言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたは見るようになります。」

イエス様は、これから、もっと大きなことを見ることになる、と言ってくださっています。この方が確かに神の子で、キリストであられることを、様々なしるしによって見るようになるということです。2 章には早速、カナにおける婚礼で、水がぶどう酒になるのを彼らは見るようになります。

そして、ヤコブが天からのはしごの夢を見たことを、ここで言及されています。午前礼拝の説教を後でお聞きください。ヤコブはそこを、「神の家だ」と呼びました。なぜなら、天におられる神が、地上にいるこの自分に届いてくださったからです。そして、イエス様はご自分を人の子と呼ばれ、「神の御使いたちが人の子の上を上り下りする」と言われます。つまり、ご自身が天からの梯子なのだということです。イエスがおられるということは、天に直結しているのです。

ですから、私たちは、この方を見るという恵みをもっと受けないといけません。そして、この方が私たちを見ておられると言うことを知らないといけません。顔と顔を合わせるという、モーセと主との交わりにあった表現は、私たちにとって死活的なことです。その反対をしたのが、罪を犯した後のアダムは、「創世 3:8 神である主の御顔を避けて、園の木の間に身を隠した。」とあります。